第5学年 国語科の実践

1、単元名 「天気を予想する」

2、単元目標

○天気に興味をもち、作品を進んで読もうとしている。【関】

○前半部分と後半部分の書かれ方の違いに着目し、

筆者が伝えたいことを考えながら読むことができる。【読】

○筆者が伝えたいこと、論の進め方、図表などの活用について感想を発表し合い、

自分の考えを広げたり深めたりすることができる。【読】

関心・意欲・態度	読むこと
・題材、筆者の考え、文章の書かれ方に興味をもって読んでいる。	・筆者が事例、理由や根拠として挙げている事実を読み取っている。 ・筆者の主張、根拠を自分なりに評価する観点をもち、筆者の主張についてまとめることができる。

3、ひびき合う子どもたちをめざすための指導の工夫

研究課題 「切実な問題意識を持ち、友だちと関わり合いながら学習する子どもの育成」

手立て…子どもの「切実な問題」を見とった授業づくり

ブロックテーマ「仲間に共感しつつ、自分の思いも大切にする姿」

「新しい価値観に触れ、自分を再構築する姿」

(1) 教材について

本単元は、学習指導要領第5学年「読むこと」の指導事項(1)一ウ「目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり、事実と感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながらかつ読んだりすること」、(1)一オ「本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすること」に基づいたものである。

本教材は、人間生活において身近でありながら、あまりよく知られていない天気予報を題材としている。天気予報の的中率が近年高くなった理由と百パーセント的中させる難しさについて、図やグラフなどを使って説明した上で、天気の変化を予想し、次の行動を判断するのは自分自身であることを主張した説明文である。最初に文章全体を覆う大きな問いがあるわけではなく、小さな問いがあって答えがあり、そのつながりからまた新たな問いが生まれてくるということを三回繰り返す構成となっている。また、図やグラフを用いながら事実を説明している部分(前半)と、筆者の考えを述べている部分(後半)からなっておりとらえやすい。「新聞やテレビなどで知る天気予報は、以前に比べ、ずいぶんと的中するようになりました。」という書き出しで始まる。どうして的中するようになったと言えるのかと読者の興味をひく書き出しになっている。そこで筆者はデータを表で示している。この表を使い、数値を挙げて説明することでより説得性を持たせている。また、表があると一目で五年ごとの的中率が徐々に上がっているのがわかり、読者自身が表で確かめて筆者の考えの確かさを確認することができる書き出しになっている。また、この表を見ることで的中率がこのまま上がり続けるであろうと、読者が思える。読み手の思考の流れに沿いながら、自分の主張へと徐々に論の方向性を向けていく展開となっている。表・写真・図・グラフなどの非連続型テキストが用いられ、説明が展開されている。資料を用いて説明することで、読み手の納得を促すように意図され、説明のしかたについて読み取り、考えるのに適した教材である。また、気象予報士の人が書いた文章ということもあり、天気に関する専門的な言葉が多く使われ

ている。児童にとって難しく感じたり、どんなものかわからない言葉も使われたりしている。筆者はそれらを読者にもわかりやすいように写真などを活用し、説明を進めている。児童はそれを手掛かりに言葉や専門用語を理解できるであろう。また、具体的な数値を挙げ、筆者の考えの根拠を説明している。これについても説得力があると感じる児童も多いと考えられる。しかし結論では、筆者自身が撮影した写真一枚を活用しているのみである。それは自然を自分自身で感じることの例えにもなっていると考えられる。また、続く「グラフや表を引用して書こう」で自分の考えについて理由付けを明確にしながらか説明文を書くようになっていく。この学習によって、ただ情報に頼って判断するだけでなく、それをもとに自分で考え、判断できる力を養いたいと考えている。

(2) 理科「雲と天気の変化」との関連

理科で「雲と天気の変化」を学習してきている。そこでは、雲の量や動きを調べ、天気の変化と雲の量や動きが関係していることをとらえてきた。また、天気はおよそ西から東へ変化していくという規則性にも目を向けてきた。学習の最後には、「目指せ！気象予報士」と銘打ち、週間予報をした。子どもたちは天気を予想することが難しいと感じているが、今後1週間の天気を予想するのに、雲画像やアメダスの情報、天気にもつわる言い伝えを利用し、予想を個人、グループで行い、天気についての関心を高めてきた。子どもたちは実際の空を観察したり、言い伝えで予想したりしてきた。いろいろな方法を使い予想しているが、毎日、新聞やテレビで知る天気予報はといったどのように予想されているのかということに目を向けさせ、本単元へ導入していきたくて考えている。天気予報を判断しているのは気象予報士という人だということを知り、気象予報士はどのように天気を予想し、さらにはどのような考えをこの作品で伝えたいのかを、文章から読み取っていくことを本単元のめあてとしていきたい。

(3) 説明文の読み取りについて

新しいことを知ったり、提示された課題が解決されていったり、自分には考えつかなかった筆者の主張に出会ったりすることはおもしろい。そういった説明文の魅力を感じられるよう、文書の読み取りをしっかりと行っていきたい。本教材の筆者である武田康男さんは気象予報士であり、南極で1年間生活をした経験がある。南極での生活では、天気を予想しておくことは命にかかわることであり、予想するのに科学技術を利用する方法は大切であると考えている。教材内では、科学技術の進歩で天気予報の的中率は上がっている事実を図や表を使って説明している。しかし、100%的中させるのは難しいという考えも述べられている。自分で天気に関する知識を持っておくこと、自分で自然を感じる大切だと結論で述べている。筆者がどちらの思いを強く持っているかは児童の興味を引くところだと考えられる。「筆者はいったい何が言いたいのだろうか」という知的好奇心が出てくることを期待したい。この思いを中心に単元を進めていきたい。読み取りの段階で、どの部分に筆者の思いが書かれているのか、子どもたちがどのように読んでいるのかを見取っていく。具体的には、事実や事例をいくつか挙げて具体的な説明をしている部分と、筆者の感想や意見を述べている部分とがある。筆者がどのような事例を挙げ、自分の感想や意見を述べているかを理解していくために、それらを色別のラインで区別させていく。色分けすることでそれらが関連していること、筆者の考えの根拠となっていることを理解できるようにしていきたい。その中で図・表・グラフ・数値を具体的に挙げて説明しているところではその効果を考えさせていきたいと考えている。

(4) ひびき合いについて

本時では、これまでの学習を生かして、筆者が一番伝えなかったことは何かを話し合う。「筆者は何を伝えたいのだろう」という課題についての話し合いで、結論部分に注目する子や、科学技術のすばらしさに注目する子が出てくると思われる。この話し合いを通して、結論中の筆者の思いに気づけている子は要旨についての自分の考えに自信が持てたり、図や写真に注目している子は友だちの考えのよさに気づいたりする姿を「ひびき合い」としたい。

4、単元指導計画（全7時間）

時	学習活動	評価規準
①	○天気予報士の書いた文章を読んでみよう。 全文を読む。学習課題の設定をし、見通しをもつ。	天気や天気予報について自分の経験を進んで話し、興味をもって文章を読んでいる。【関】
②	○文章の構成と筆者の説明のしかたの工夫を読み取る	三つの問いと答えを見つけ、それぞれの関連を読み取っている。【読】 表・写真・グラフ、数字の使い方について、筆者の意図やその効果に気づいている。【読】
③	・文章中の3つの問いと答えの関連を考える。	
④	・ 的中率が上がった理由 ・ 百パーセント的中させるのは難しい理由 ・ 突発的・局地的な天気の変化を予想するにはどうしたらよいか ・ 筆者が表・写真・図・グラフを用いた意図を考える。 ・ 文章中に数値が用いられることの効果を考える。	
⑤	○天気予報士である筆者が伝えなかったことを読み取る（本時）	
⑥	・ 筆者が伝えなかったことに対して自分の意見を持ち、交流する。	筆者の考えとその根拠となる事実をとらえ、筆者が伝えなかったことをまとめている。【読】 三つの観点に沿って、自分の考えを書いている。【読】
⑦	○図・表・グラフ・写真を使った説明の効果について考える ・ 身近にあるものから資料を探し、その意図や効果について考える。 ・ 学習のまとめ	語と語のまとまりや、接続のしかたについて理解している。【言】 図・表・グラフ・写真を使った説明の効果を整理している。【読】

5、本時について（5/7）

(1) 本時目標

・「天気を予想する」で、筆者が一番伝えなかったことを読み取り、発表することで自分の考えを深めることができる。

(2) 本時展開

学習活動	指導上の留意点・◇評価
○本時のめあてを知る。 筆者が一番伝えなかったことはなんだろう ・ ⑩段落に自分で空を見、風を感じることを大切にしたいと書いてあるからこれだよ ・ 科学技術を使えば的中率が上がっているよ ・ 筆者は科学技術を生かした予報と自分の天気に関する	・ これまでの学習を想起する。 ・ 自分の考えをこれまでの学習を根拠として書いてまとめる。 ◇筆者の論の進め方や資料の活用の意図をもとに、筆者の伝えたいことを読み取っている。【読】

<p>知識のどちらを大切にしているのだろうか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分で感じることを書いてあるから自分の知識だよ ・どちらもうまく使えばいいのでは？ <p>○学習のふりかえりをする</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全体で話し合う前に自分の考えを見直したり、ペアで交流したりする。 ・筆者の考えについての自分の考えをもち、交流する。
--	--

6、実践を終えて

(1) 子どもとどのように単元を作ってきたか

先にも述べたように、理科の学習「雲と天気の変化」で、雲が移動することと天気が変わることの関連を調べ、自分で天気を予想する活動を行った。「靴が裏向くと雨だよ。」「富士山の方に雲が見えたらもうすぐ雨だ。」など、言い伝えを頼りに天気を予想する児童が多かったので、やはり予想的中確率にはばらつきがあった。そこから実際の天気予報はどうしているかという関心につなげ、本教材「天気を予想する」を読むことにした。本教材では、実際に天気予報をしている気象予報士が作者となっている説明文であることを知り、その人がどのように天気を予想しているかを読み取ることができると考えた。

「実際に天気予報をしている人はどのように予報しているのかな。」という疑問から、「筆者が一番伝えなかったこと」を読み取ることが単元の課題とし、学習を進めた。さらに、本教材で意図的に提示されているグラフ・表や写真に注目しその効果を考えて。子どもたちの初発の感想では、「写真があつてわかりやすかった。」「的中率の表で確かに確立が上がっているのがわかる。」など、教材中に用いられているグラフ・表、写真に注目する感想をもっている子もいた。そこで各段落の読み取りの際に、グラフ・表や写真にも読み手に伝えたい思いがあることを知り、それらを用いた筆者の意図を考えた。また、「的中率はどのように高くなったのか。」「天気予報は百パーセント的中するようになるのか。」「突発的・局地的な天気の変化を予想する手立てはないのか。」という筆者の問いに対する答えの段落、文章を読み取った。

「やっぱり科学技術はよくなっているんだな。」「百パーセント的中するようになってほしいけど、むずかしいのか。」「言い伝えって結構当たるんだな。」など、多くの子が答えの段落を読み取ることができた。本文中のいくつかの事実データと筆者の考えが書かれている部分について色分けして区別し、最初に挙げた「筆者が一番伝えたいこと」を考えることとなった。「科学技術の進歩について言いたいんじゃないかな。」「最後の段落に自分で空を見て風を感じることを大切にしたいと書いてあるからそれではないか。」と二つの意見に分かれた。本時では自分の読み取ったことについて根拠をもって話し合うことになった。「結論部分に書いてあることが筆者の思いだから、自分で空を見て風を感じることを大切にしたいと伝えたいと思う。」「最初に写真や表で的中率を伝えているから科学技術の進歩を伝えたいんだと思う。」という意見を出し合う中で「意見が変わった」という子もいた。

(2) 本時の課題が子どもの切実な課題となったか

本時の課題は子どもたちの切実な課題であったとは言えないととらえている。「筆者が一番伝えたいことはなんだろう」という課題について、教材文の序論部分の「科学技術の進歩」に注目している子どもと結論部分の「自分の目で空を見ることを大切にしたい」という大きく分けて二つの意見が出され、根拠を含めて話し合った。しかし、自分の考えにこだわりをもって話し合いが進められていなかったことがその理由であるととらえている。「筆者はいったい何が言いたいんだろう」という知的好奇心が出てくることを期待していたが、筆者の思いに注目させる手立てが足らず、話し合いではなく、自分の考えを

言い合うというような形になってしまった。

(3) 成果と課題・ひびき合い

「筆者は何を伝えたいのだろう」という課題についての話し合いで、結論部分に注目する子や、科学技術のすばらしさに注目する子が出てくると思われた。この話し合いを通して、結論の「自分で空を見て風を感じることを大切にしたい」という筆者の思いに気づけている子は、自分の考えに自信が持てたり、図や写真に注目している子は友だちの考えのよさに気づいたりする姿を「ひびき合い」としてきた。予想した通り、単元中に科学進歩の表に注目し、的中率が年々上がっていることと、自分で空を見ることが大切と述べている結論部分に注目する子があつた。本時では自分の考えにこだわりをもって、友だちの考えと比べたり自分の考えを強めたりすることができなかつた。しかし、単元中に友だちの考えを聞いて、自分の考えと比べ、より納得できるものを自分の考えとできたことは成果と考える。読み取りの苦手な子どもも自分なりの読みを書いて表現することができた。課題としては、子どもたちが自分の考えにこだわりをもつと持てるように、文章の読み取りに十分な時間をとることが必要だつたと考える。また、教師が子どもたちの読み取つたことをひびき合わせるために、教材分析の際に子どもたちの関心をより明確に押さえ、単元を構成する必要があつたと考える。